

## 対応する動詞形のないV1 + V2型複合名詞について — 辞書からのリストアップの試み —

鈴木 智美

【キーワード】 複合名詞、複合動詞、連用形、品詞の転成、リスト化

### 1. 本稿の目的

本稿の目的は、「動詞(V1) + 動詞(V2)」の形をとる複合名詞(以下、本稿では「V1 + V2型複合名詞」とする)のうち、現代日本語において対応する複合動詞の形が用いられないタイプのものに、どのような語があるのかを一部リスト化して示すことである。

このようなタイプの「V1 + V2型複合名詞」には、例えば以下のようなものがある。

- (1) 読み書き、乗り降り、立ち読み、押し売り、飛ばし読み、思い出し笑い<sup>1</sup>

(1)に挙げた複合名詞は、いずれも「動詞(V1) + 動詞(V2)」の構成を持つ。しかし、これに対応する「\*読み書く」「\*乗り降りる」「\*立ち読む」「\*押し売る」「\*飛ばし読む」「\*思い出し笑う」のような複合動詞の形は、通常用いられない。「動詞 + 動詞」型の複合名詞にこのようなタイプのものがあることは、従来指摘されている点である<sup>2</sup>。

では、対応する複合動詞を持たないこのようなタイプの「V1 + V2型複合名詞」には、現代日本語において、どのようなものがどれぐらい存在するのだろうか。

石井(2007)は3種の辞書<sup>3</sup>を調べた結果、このようなタイプの複合名詞が461語抽出できた<sup>4</sup>としている。そして、結合数の多かった造語成分(前項・後項動詞)を示すとともに、適宜例を挙げつつ、前項動詞と後項動詞の意味的關係について詳細な検討を行っているが、その461語は一覧としては示されていない<sup>5</sup>。他の先行研究においても、部分的にこのような複合名詞については触れられているものの、いずれも網羅的なリストが示されているわけではなく、具体的にこのタイプの複合名詞にどのようなものがあるのか、その全体像を参照できる資料がない。

## 2. 「V1 + V2 型複合名詞」

「V1 + V2 型複合名詞」には、まず、対応する複合動詞を持つタイプのものとして、例えば以下のようなものがある。

- (2) 話し合い、申し込み、受け付け、締め切り、生き残り、追い越し、呼びかけ、取り違え、開き直り、突き当たり、行き詰まり

複合名詞「話し合い」は、前項動詞「話す」(V1)と後項動詞「合う」(V2)が複合された形を持つ。後項動詞「合う」は連用形の形をとり、品詞の転成が生じて、全体として複合名詞となっている。このタイプの複合名詞は、国立国語研究所(1985: 13)でも言われているように、もともと複合動詞であったものが名詞化したものと考えられ、以下の(3)のように、いずれも対応する複合動詞の形が存在する。

- (3) 話し合う、申し込む、受け付ける、締め切る、生き残る、追い越す、呼びかける、取り違える、開き直る、突き当たる、行き詰まる

西尾(1961: 63-64)も、上記のタイプの複合名詞は、「複合動詞の連用形と見るべきもの」としている。

一方、「V1 + V2 型複合名詞」には、国立国語研究所(1985: 13)に「前項が後項と意味の上で、対比や並列を示す構造になっている場合は、動詞として働かないのが原則だ」とされているように、対応する動詞形を持たない以下の(4)のようなタイプのものも見られる。

- (4) 読み書き、貸し借り、やりとり、乗り降り、開け閉め、上げ下げ、上り下り

(4)に挙げた複合名詞は、「\*読み書く」「\*貸し借りる」「\*やりとる」「\*乗り降りる」「\*開け閉める」「\*上げ下げる」「\*上り下りる」などの形は持たない。

ただし、対応する動詞の形を持たないこのような複合名詞には、必ずしも前項と後項が意味的に対比や並列の関係を示すものばかりではなく、以下のようなものも見られる。

(5) 立ち読み、生き写し、建て売り、押し売り、飛ばし読み、思い出し笑い

(5)に挙げた複合名詞も、「\*立ち読む」「\*生き写す」「\*建て売る」「\*押し売る」「\*飛ばし読む」「\*思い出し笑う」などの対応する動詞の形は持たない。しかし、これらは(4)とは異なり、前項動詞と後項動詞は特に対比や並列の構造で複合されているわけではない<sup>6</sup>。

西尾(1961:64)は、動詞の連用形から形成された「連用形名詞」を分類・考察する中で、動詞連用形2つ(以上)から成り立ち、対応する複合動詞の形が使われない複合名詞には、2つの種類があることを指摘している。

その1つは、意味的に「上の連用形が連用修飾的に下の連用形にかかっているもの」とし、もう1つは「対比的な概念をあらわす動詞の連用形二つが並立関係にあるもの」としている。前者の例としては「売れ行き、飛び読み、切り売り、すくい投げ、吸い飲み、立射ち、思い出し笑い」が、後者の例としては「売り買い、貸し売り、上げ下げ、上がり下がり、出し入れ、乗り降り、浮き沈み」が挙げられている。

国立国語研究所(1985)が、原則として動詞の形がないとする「前項と後項が対比や並列の関係」にあるものとは、上記の西尾(1961)の指摘する後者の「動詞の連用形2つが並立関係にあるもの」と、同じタイプのものを示すと考えてよいだろう。

このタイプについては、石井(2007:101)は、さらに以下の3つのタイプに下位分類できるとしている。まず、前項と後項が「対立する《動作》や《変化》」を表すタイプ(「送り迎え」「売り買い」「出し入れ」など)、また「関連のある《動作》や《変化》」を並べたタイプ(「飲み食い」「読み書き」「煮炊き」など)、そして最後に「《動作》の反復や《変化》の広がり・断続」を表しているタイプ(「這い這い」「切れ切れ」「散り散り」など)である。

一方、(5)に示したようなタイプのものは、前項と後項とが対比や並列の関係にはなく、西尾(1961)の言うもう1つのタイプの「上の連用形が連用修飾的に下の連用形にかかっているもの」にあたると思われる。

ただし、この「下の連用形にかかっている」は曖昧さを残す記述である。この点について、石井(2007:99-101)は、このような複合名詞の語構造の特徴を「動詞+動詞」型の複合動詞の語構造と対比させることにより、より詳細なタイプ分けを行っている。

そこでは、対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」には、複合動詞と同じく「過程結果構造」を持つ少数のもの<sup>7</sup>と、それ以外の「非・過程結果構造」のタイプがあるとして大きく分け、後者には、「前項が後項を意味的に限定しているタイプ」、および上記に述べたような「前項と後項とが並立関係にあるタイプ」が含まれるとしている。この「前項が後項を意味的に限定しているタイプ」は、さらに詳細に6つのタイプに下位分類している<sup>8</sup>。

### 3. 対応する動詞形のない「V1 + V2型複合名詞」

本稿では、現代日本語において、対応する動詞形のない「V1 + V2型複合名詞」にどのようなものがあるのか、そのリスト化を目指した試みを行う。

ここでは、約23万8千項目を収録するとされる総合的な国語辞書<sup>9</sup>『大辞林 第三版』(2006年)を資料とし、「あ行」(あ～お)の見出し語の中から、動詞の対応形を持たないと見られる「V1 + V2型複合名詞」を網羅的に抽出し、リスト化した<sup>10</sup>。抽出の際には、前項と後項とがどのような関係で結びついているかについては現段階では特に区別をしていない。また、注4に述べたように、石井(2007)では「造語成分がすでに名詞になっていると思われるもの」、「造語成分が接辞化していると考えられるもの」、「現代語としてすでにその語構造が分析できなくなっていると考えられるもの」は除外されている。本稿では、現段階ではこれらも区別なく含め、まずは一通り「V1 + V2型」の複合名詞を抽出することにした<sup>11</sup>。

その結果を、以下の表に示す。見出し項目「あ～お」において、対応する動詞形を持たないと考えられる「V1 + V2型複合名詞」は、全93語抽出できた。このうち現代語として分野の偏りなく用いられるだろうと思われる語は、表1に示す28語である。この他、使用される分野が限定されているのではないかとと思われる語が表2に示すように50語、古語の性格が強く、現代語として日常的に用いられるとは思われないもの<sup>12</sup>は、表3に示すように15語あった。以下の表2では、使用される分野が限定されていると思われる語について、「金融・取引用語」「住宅・建築用語」「芸能用語」など、本稿における分類用語を付している。

また、この93語の他に、語源的に見れば対応する動詞形を持つとされるのだが、現代日本語としてはそれが自然に用いられるとは思われないものが、表4に示すように8語観察された。

また、この他に上記の93語の中には含めていないが、構成要素の一方が名詞として用いられていると思われる語が3語(「痛み止め」「祝い返し」、「受け狙い」)、

後項が接辞であると考えられる語が1語(「下ろし立て」)、また後項が名詞とも接辞(「-くら」)ともとらえられるものが1語(「押し競べ」)あった。

表1 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」:  
『大辞林 第三版』あ行(あ～お)の項目より

逢い引き	上がり下がり	上げ下げ	開け閉め	開け閉て
当たり障り	当たり外れ	当て逃げ	当て外れ	荒れ止め
生き写し	生き埋め	行き来	行きずり	浮き彫り
受け払い	討ち死に	恨み死に	売り食い	追い炊き
起き抜け	置き引き	押し売り	躍り食い	覚え書き
思い出し笑い	折り詰め	降り乗り		

表2 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」:  
使用分野が特定されると思われるもの  
(『大辞林 第三版』あ行(あ～お)の項目より)

揚げ継ぎ	園芸用語	織り付け	工芸用語
合わせ継ぎ	園芸用語	織り留め	工芸用語
置き注ぎ	宴席用語	行き触れ	宗教・信仰用語
上げ書き	習俗・儀礼用語	生けはぎ	宗教・信仰用語
揚巻	習俗・儀礼用語	忌み明け	宗教・信仰用語
上げ優り	習俗・儀礼用語	忌み違え	宗教・信仰用語
上げ劣り	習俗・儀礼用語	煽り止め	住宅・建築用語
煽り買い	金融・取引用語	落とし閉て	住宅・建築用語
浮き貸し	金融・取引用語	落とし積み	住宅・建築用語
請け書き	金融・取引用語	折り上げ	住宅・建築用語
売り浴びせ	金融・取引用語	追い刷り	出版・印刷用語
売り掛け	金融・取引用語	入れ食い	釣り用語
売り据え	金融・取引用語	射向け	武芸用語
売り持ち	金融・取引用語	落とし差し	武芸用語
当て振り	芸能用語	合い挽き	料理用語
居語り	芸能用語	和え作り	料理用語
活け殺し	芸能用語	揚げ出し	料理用語

置き生け	芸能用語	揚げ煮	料理用語
追い切り	競馬用語	揚げ浸し	料理用語
合わせ吹き	工芸用語	合わせ焼き	料理用語
浮き上げ彫り	工芸用語	生き作り	料理用語
浮き織り	工芸用語	活け締め	料理用語
受け貼り	工芸用語	炒め煮	料理用語
起き揚げ	工芸用語	落とし焼き	料理用語
織り締め	工芸用語	卸し和え	料理用語

表3 対応する動詞形を持たない「V1 + V2型複合名詞」：古語と思われるもの  
 (『大辞林 第三版』あ行(あ～お)の項目より)

上げ <sup>くだ</sup> 下し	宛て書き	行き立て	凍て解け	入り繰り
入り取り	入れ立て	打ち交い	打ち交え	生まれ立ち
老い入れ	追い書き	押し送り	思い寝	折り据え

表4 対応する動詞形が現代語としては用いられにくい「V1 + V2型複合名詞」：  
 『大辞林 第三版』あ行(あ～お)の項目より

上げ下ろし	行き帰り	行き止まり	浮き沈み
売り買い	起き臥し	送り迎え	押し引き

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、「V1 + V2型複合名詞」のうち、対応する複合動詞のないものをリスト化するための試みとして、総合的な国語辞書『大辞林 第三版』(2006年)を資料とし、「あ行」(あ～お)の見出し語の中から、このタイプの複合名詞を網羅的に抽出した。

該当する語は93語であったが、日常的に使用されると思われる語は、このうち28語(表1)であった。他は使用される分野が限定されているか(表2)、古語の性格が強いもの(表3)と思われる。また、語源的に見れば対応する動詞形を持つのだが、現代日本語としてはそれが自然に用いられるとは思われないものが、この他に8語観察された(表4)。

日本語教育の視点から考えると、最終的にリストとして有用になるのは表1と表4の内容ではないかと思われる。また、リスト化するにあたって資料とする国

語辞書については、百科事典的な役割を担う項目数の多い辞書を用いてリストを絞り込んでいくか、あるいは始めから項目数を限定した現代語を中心とする小型～中型の辞書を対象とするか<sup>13</sup>、2つの方向性が考えられる。対応する動詞形を持つかどうかについては語源的な確認作業を要するが、語源的に動詞の対応形を持つかどうかということと、現代日本語としてその動詞形が自然に用いられるかということは別のことになる。日本語教育において役立つ資料を作成するのであれば、後者の基準は必要であろうと思われる。

## 注

- <sup>1</sup> 「思い出し笑い」は、前項動詞 (V1) がさらに「思い出す」という複合動詞の形をとっている。本稿で対象とする「V1 + V2型複合名詞」には、このように前項動詞 (V1) あるいは後項動詞 (V2) がさらに複合動詞の形をとっているものを含めることとする。
- <sup>2</sup> 例えば、複合動詞の構造について論じた長嶋 (1976:103) では、複合動詞の中には、同じ動詞を後項動詞としていても、複合名詞を作ることのできるもの (「呼び出す」→「呼び出し」、「座り込む」→「座り込み」など) と、できないもの (「思い出す」→「\*思い出し」、「考え込む」→「\*考え込み」など) があることを指摘し、逆に「立ち食い」「立ち読み」という名詞形には、対応する「\*立ち食う」「\*立ち読む」などの動詞形がないということについても触れている。
- <sup>3</sup> 『学研国語大辞典』『岩波国語辞典 第二版』『新明解国語辞典 第三版』を用いたとのことである。
- <sup>4</sup> ただし、造語成分がすでに名詞になっていると思われるもの (「痛み止め」「染み抜き」「別れ話」など)、造語成分が接辞化していると考えられるもの (「書き振り」「食い掛け」「隠し立て」「借りっ放し」など)、また現代語としてすでにその語構造が分析できなくなっていると考えられるもの (「掻い巻き」「踏み継ぎ」など) は除外したとしている。
- <sup>5</sup> また、石井 (2007:98) でも触れられているが、抽出した461語の中には、実は対応する動詞形を持つと考えられるものがいくつか混ざり込んでいるようでもある。資料とした3種の辞書の範囲内で、対応する動詞形がたまたま載せられていなければ、「対応する動詞形なし」として処理された可能性があると思われている。
- <sup>6</sup> 国立国語研究所 (1985:13,29) でも、その前項と後項の関係には触れていないものの、対応する動詞形を持たない複合名詞として、対比や並列の関係とは思われない「考え違い」「立ち泳ぎ」「洗い張り」「建て売り」などの例も挙げられている。

- <sup>7</sup> 「過程結果構造」を持つ複合名詞には、複合動詞と同様の構造を持つものと、構成要素の結合順序が複合動詞とは逆のタイプのものがあるとしている(石井2007: 98-103)。前者の例は、「飛び入り」「飢え死に」などで、前項が《主体の動作》を表し、後項がそれによって実現される結果としての《主体あるいは客体の変化》を表すもの、後者の例は「崩し書き」「隠し縫い」などで、後項が《主体の客体に対する動作》を表し、前項がそれによって実現される結果としての《客体の変化》を表すものとされている。
- <sup>8</sup> 「前項が後項を意味的に限定している」タイプには、A「前項が、後項のうごきの主体の『状態』を表す」タイプ(「立ち食い」「立ち読み」「出稼ぎ」など)、B「前項が、後項のうごきの『様態』を表す」タイプ(「弾き語り」「走り書き」「寝押し」など)、C「前項が、後項のうごきの『目的』を表す」タイプ(「覚え書き」「試し切り」など)、D「前項が、後項のうごきの『原因』を表す」タイプ(「聞き怖じ」「酔い泣き」など)、E「前項が、後項に先行する『うごき』を表す」タイプ(「洗い張り」「買い食い」「書き置き」など)、F「前項が、後項のうごきの客体の『うごき』や『状態』を表す」タイプ(「躍り食い」「生き埋め」など)の6つのタイプがあると分類されている(石井2007: 99-101)。
- <sup>9</sup> 初版の序には、「現代語の記述に重点を置きつつ、古語や百科語をも含めた総合的な国語辞典をめざしたもの」とある。
- <sup>10</sup> 現代語の感覚から、もはや動詞の対応形を持つかどうか判断がつきにくくなっている場合には、『日本国語大辞典 第二版』にあたって確認した。『大辞林 第三版』において対応する動詞形が項目として取り上げられていなくても、語源的には対応する動詞形を持つというものは、今回対象とした項目の中でも30語ほど確認された。
- <sup>11</sup> 例えば「受け狙い」という複合名詞は、「『受け』(観客や聴衆に笑ってもらうこと、あるいは多くの人に支持されること)を狙うこと、即ち『受け』を獲得することを目標とし、それを意図して行うこと」という意味の複合名詞であり、「名詞『受け』+動詞『狙う』」の構成を持つ複合名詞と思われる。本稿では、その旨を注意書きすることとした上で、この「受け狙い」などもまずは抽出の対象とした。
- <sup>12</sup> 現代語として用いられる語かどうかの判断には、『明鏡国語辞典 第二版』(2010年、項目数約7万)、『岩波国語辞典 第七版新版』(2011年、項目数約6万5千)、『新明解国語辞典 第七版』(2012年、項目数約63,500)の3種の比較的新しく、かつ項目数の絞られた辞書も参考にした。
- <sup>13</sup> ただし、この場合には複数の辞書を並行して参照することが必要になるとと思われる。小型～中型の辞書では、収録項目数が限られているため、ある語が見出し項目として取り上げられるかどうかには辞書によって異なりが出る可能性がある。



今回対象とした項目の中でも、「恨み死に」「躍り食い」などは、上記注12に示した3種の辞書のうち2種のみに記載が見られた。また今回の対象項目ではないが、「飛ばし読み」は上記3種の辞書ではいずれも項目として取り上げられていなかった。

#### 引用文献

- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』(ひつじ研究叢書〈言語編〉第49巻)ひつじ書房
- 国立国語研究所(1985)『語彙の研究と教育(下)』(日本語教育指導参考書13)
- 長嶋善郎(1976)「複合動詞の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』大修館書店 pp.63-104
- 西尾寅弥(1961)「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』第43集 pp.60-81

#### 辞書

- 北原保雄(編)(2010)『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
- 金田一春彦・池田弥三郎(編)(1988)『学研国語大辞典 第二版』学習研究社
- 西尾 実・岩淵悦太郎・水谷静夫(編)(2011)『岩波国語辞典 第七版新版』岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部(編)(2000-2001)『日本国語大辞典 第二版』第1巻～第3巻 小学館
- 松村明(編)(2006)『大辞林 第三版』三省堂
- 山田忠雄・柴田 武他(編)(2012)『新明解国語辞典 第七版』三省堂